山形県内における図書館の複合化の動向と今後について

― 酒田・村山・米沢の事例に ―

安達　春美

公共施設づくりにおいて、市民ニーズの多様化への対応とコストダウンが問われている。集客力が高い図書館はまちづくりや地域振興に役立てる目的で様々な機能を持つことが多くなった。

以上を背景に、本研究では山形県内において図書館機能を含む地域活性化を目的とした村山市、米沢市の複合施設を対象に、複合施設の特性と取り組みに対する聞き取り調査と図書館職員へのアンケートを行った。周辺地域の反応を含め調査することで、複合図書館の及ぼす効果と課題を明らかにすることが目的である。また、それらをもとに計画中のコミュニケーションポートによって起こる影響を予測することで、リスク回避やよりよい公共施設の実現に繋げる。

その結果、同じ地域活性化を目的とした複合図書館でも、村山市立図書館を併設する甑葉プラザはまちづくりに関わる様々な機能が集約したワンストップ型、市立米沢図書館を併設するナセ BA は併設施設をシンプルにすることによって周辺地域への回遊性を促す文化交流機能に特化した機能集約という違いがあった。どちらの施設も集客や周辺地域への回遊性において一定の効果を示しており、図書館としても従来のサービスを応用して施設内での連携に繋げる動きがあった。

それを踏まえて酒田コミュニケーションポートについて考察すると、村山に近いワンストップ型の機能集約である事がいえ、併設施設内での情報共有による連携が重要となる。観光情報センターが併設されることから地域住民の情報提供による観光資源マップが計画されており、それに合わせ仕事上の悩みなどの情報収集を行い蔵書や市の支援策を紹介するビジネス支援などを行うことで地域活性化につながるだろう。